



ボケとツッコミという視点で捉える 研究論文

■ サンキュータツオ

芸人という職業柄、世の中で起こっている出来事を「おもしろいか」「おもしろくないか」で判断することが多いです。さらに、それらを「ボケ」的か「ツッコミ」的かで捉えようとします。

たとえば芸能人の不倫や、企業による個人情報の漏えい、とある国が核開発などを秘密裡にしていたことが発覚したとします。その現象は「ボケ」です。「けしからん！」とか「記者会見しろ」「謝罪しろ」というのは「ツッコミ」です。ボケが謝罪したら、ネタでいう「どうもありがとうございました」という締めの挨拶です（採り上げた例に他意はありません）。なかなか謝罪しないボケは貴重です。

最近「ツッコミ高ボケ低」の時代です。小さいボケに鬼のようなツッコミが入りまくり、ちょっとした失敗をただけでもボケ側が土下座などしないと締めの挨拶になりません。ただし、あまりに大きいボケの前に、ツッコミの声が小さくなってしまうこともたまにあります。あまりに衝撃的な事件だったり、議論されている政治的問題のボケが大きすぎて、どんな正論も通じなくなってしまう。どうしてもバランスが悪い。こういう社会が良いか悪いかは分かりませんが、おもしろくはありません。

ツッコミには芸が必要です。一番いいのはツッコミもおもしろいことです。世の中で、まだその仕組みや現象が理解できていないものは「ボケ」です。つまり学問の対象となるような問題はすべて「ボケ」です。これに対して、なぜそういうことが起こっているのか、何が

■ サンキュータツオ
学者芸人・漫才師（米粒写経）

1976年東京生まれ、一橋大学非常勤講師。早稲田大学大学院博士後期課程修了（文学修士）。漫才コンビ「米粒写経」として活躍。著書に『学校では教えてくれない！国語辞典の遊び方』『ヘンな論文』。



起こっているのか、あらゆる角度でボケを解体、解明、または調査していく作業が「ツッコミ」です。つまり研究はすべて「ツッコミ」ですね。ただ、みんながそんなに興味のない小さい「ボケ」に対して、「ツッコミ」続けている、そういったものを論文として発表した場合、それは私にとって「おもしろい論文」ということになります。

タイトルだけでもご紹介すると「将棋倒しの速さ」「花札の図像学的研究」「パイナップル果汁を含むゼラチンゼリーの作成」「縄文時代におけるクリ果実の大きさの変化」「起き上がるカブトムシの観察」などです。だれしものがスルーしていた「ボケ」に切り込んだ「ツッコミ」が、「研究領域」というステージの外側、つまり客席から見てみると、思わず笑ってしまうレベルでおもしろいです。だからなんなんだよという心の声が漏れてしまいそうです。昨年の情報処理学会論文誌にも、「複数ナップサック割当て問題の厳密解法」という論文がありました。ボケを加工し自らツッコむ、究極のピン芸を見た気がしました。

『ヘンな論文』という本を著しましたが、世の中にはこういったボケとツッコミを両立させている論文が無数に存在しており、それを収集するのが私の趣味です。科学コミュニケーションには、こうした門外漢（観客側）から見たステージ（研究、論文）という視点が必要なようです。

みなさん、どんどんツッコみましょう！

